

【職業教育コラム（宮田雅之①）】

「実学」の二大巨頭 ～福澤諭吉と新渡戸稲造～

「職業教育」と似た言葉に「実学」がある。コトバンクによると「(理論的研究・基礎的研究に対して) 習った知識や技術がそのまま社会生活に役立つような学問」と定義されている。机上の学びではなく、現実の社会や生活に役立つ実用的な学問を指している。

「実学」と言えば、多くの人たちの頭に浮かぶのは「福澤諭吉（1835～1901 年）」であろう。福澤は「学問のすすめ」などの著書を通し、西洋の自由主義・合理主義に基づき、実用性を最優先に位置付け、国家の近代化・国民の自立に寄与する知識を広めた。まさに日本における「実学」の祖である。

一方、福澤以外にも「実学」的思想を持っていた著名人は多数存在する。西周、大隈重信、渋沢栄一などが挙げられる。その中で福澤とは異なる視点で「実学」に大きな影響を及ぼした存在として「新渡戸稲造（1862～1933 年）」は注目に値する。

新渡戸は「武士道」などの著書を通し、日本人の精神性を広く海外に紹介した。教育人としてだけではなく国際人（国際連盟の初代事務局次長）として活躍した人物である。広い見識を持った新渡戸が行きついた教育理念が「実学」である。遺した言葉の中にその本質を垣間見ることができる。

- 「僕は詩を作るより田を作れ主義である。」「僕が農工と云ふ様な実学の普及を希望するの、亦（また）此（これ）趣意に外（はずれ）ならぬ。」（著書「修養」より）
- 「子弟を教育するその目的は、先ず十中の七、八まで職業を求むるに在る。」（随筆「教育の目的」より）

福澤が西洋思想を基に「実学」を広めた「動」「拡大」の巨人であるのに対し、新渡戸は西洋思想と日本の文化・精神性との融合を通して「実学」を日本に根付かせた「静」「深耕」の巨人、と筆者は仮説を立てている。

福澤と新渡戸は、共に旧紙幣（1万円札、5千円札）の顔を担ったことに加え、近代日本の「実学」を築いた二大巨頭であったと言えよう。今後も両名の功績を様々な角度から研究して行きたい。

